

杜甫研究の現状と課題

— 中国を中心に —

近年、中国の杜詩研究は、質量ともにめざましい進展を見せつつある。杜詩研究の専門家に加えて、様々な形でそれに関わる文学者まで含めて、数が増えつつあることもあるが、何といっても杜詩が中国古典詩史上に占める重要性が、このような活発な議論の背景にはあろう。杜詩関係論文はまさに年々増加し、それにつれて相互の切磋琢磨もかなりあるらしく、好論文も次々に発表されるようになってきた。こうした近年の中国を中心とした杜詩研究の動向については、日本では遺憾ながらほとんど紹介されていない。客観的に見て今日、日本の研究者が彼らに学ぶべき点は少なくないと思われ、小文では、以下五章に分かって報告することとする。

一 杜甫研究状況の総括・問題提起に関するもの

まず、今日の杜甫研究の状況について鋭い指摘をしたものとしては、許綏氏（江蘇省社会科学院・研究員）と馮建国氏（山東大学）とがいる。まず許綏氏だが、「杜詩学大勢鳥瞰」（『光明日報』86・8・12、のち『杜詩学発微』に所収）以下、「発微」と略。南京出版社、89）で、

歴史的な杜詩学の豊富な成果に比して、建国以来の杜詩研究は

加藤 国安

未だ実質的に重要な発見と開拓をなし得ずにいる。その一方で、近年の古典文学研究における一流の作家・作品の研究はもはや氾濫しているほどであり、したがって人々は二・三流の作家・作品の研究に転じ、その空白を埋める傾向にある。これはまさに古典文学研究の閉鎖性、及び旧態依然たる方法論の必然的な結果なのである。……今日、我々は現代的視点に立って歴史的杜詩学の成果を総括し、新しい杜詩学を開拓し、科学的な「杜詩学」の体系を建立しなければならない。と同時に、美学的見地からこれまで完成していない、作家より作品に至るまでの杜詩研究全体の構築を目指すべきである。

と厳しく総括、今後のあるべき杜詩研究のビジョンを示している。この主張の一部に対し、江之氏より「二三流作家作品也值得研究」（『光明日報』86・11・4）と題する反論が出されたこともあるが、総じて今日の杜詩研究の現状を鋭く直視したもの、と受け止められているようだ。

右の許氏の主張は、彼のこれまでの多方面からの杜詩研究の総括としてなされたものだが、これをより具体的に論じたものが、同氏『杜甫研究』得失探（『学術月刊』86—1 上海人民出版社、のち

『発微』に所収である。文中、許綏氏は建国後の杜詩研究における最高の成果と、世評高い蕭滌非氏の『杜甫研究』を例に、その問題点を明らかにしている。まず氏は、おおよそ次のように指摘する。

『杜甫研究』が建国以来の杜甫研究を代表するものであればこそ、その欠点を探求することは杜詩研究にとって普遍的な意義を持つし、今後の杜詩研究の方向を探るうえでも重要なのだ。

と。そして『杜甫研究』の得失の分析結果として、許綏氏が強調するのは、現実政治と連係した文学研究のあり方への疑問である。文学は社会のために服務すべしという文学功利主義が、文学の独立した芸術性を否定してしまっている、というのである。

許綏氏がこの点をことに重視するのは、中国の伝統的な文学観がまさに文学と政治の密接な連係を前提にしていたからで、そのこと自体には無論肯定さるべき点もあるが、長い杜詩研究史に関する限りは、成果よりも弊害の方が多かった、という率直な反省があるからにはかならない。それを端的に示すのが、

蕭滌非の杜甫研究は、結局宋学と同様のものである。なぜならば、政治第一、芸術第二という視点から杜甫を捉え、叙情詩や写景詩などの芸術性の高い作品については、ほとんど軽視しているからである。

という発言である。このような政治に從属した、文学それ自身の独立性を重んじない方法論による限りは、杜詩本来の内容の研究はできない、との危機感がある。今日の中国人にとって、遠い祖先の残した栄光をただ墨守しているだけでは、何らの意味もなさないことは自明である。豊富多様な内容をもつ杜詩についても、もっと積極的に今日の目で捉え直す必要がある。そうした思いをもって、許

綏氏はこの文章を次のように締めくくる。

杜詩を深く研究するには、文献学・訓詁学・古文字学・音韻学・古地理学・歴史学等々の知識を持ち、さらに諸科学の研究方法——ことに哲学・美学・心理学・言語学・社会学・倫理学等の広範な視野が不可欠である。こうした研究方法の運用は、豊富な内容を持つ杜詩の全体に対して、必ずやさらにきめ細かな分析を可能にするだろう。このような研究こそ、科学的・体系的な杜詩学だといえるのである。

許綏氏の優れる点は、単なる理論家ではなく、自ら実践しその成果をもって、中国の学界の意識を変革させたことにある。今年(91)の『杜甫研究学刊』を見てみると、雑誌の目次の項目の中に、「杜詩学」という分野が新たに創設されていたが、これは彼の提唱した方法論が、着実に根を下ろしていることを物語ろう。中国の長い杜詩研究史を初めて総括し、また現代的な新しい「杜詩学」を探索する気鋭の研究者として、今後さらに大きな活躍が期待される。なお陳良運「許綏『杜詩学発微』試評」(『文学評論』90—3)にも、彼に対する高い評価の程が窺えるので、参照されたい。ちなみに、この陳良運氏は中堅の現代詩人・評論家で、『文学評論』などにしばしば論文を発表。『新詩芸術論集』『新詩的哲学与美学』などの著書があり、古典詩と現代詩論を結び付けて、新しい現代詩の可能性を探索している。そうした人物によって、許綏氏のこの杜詩論への深い関心が寄せられる所に、今日の中国での杜詩学界における新しい動きが、端的に現れているように思う。

次に、馮建国氏の「杜甫研究的思考」(『齐鲁学刊』90—4 曲阜師範大学)について。馮氏は、かねてより山東大学の杜詩研究の重

要なスタッフとして活躍してきた研究者である。とくに中国の杜詩研究の動向に明るく、これまで何編かを報告している。本論はそのうちの一つで、杜詩研究の過去と現状・未来を概略したものである。まずその現状への鋭い疑問が注意される。例えば、

一、もっと新しい方法論・概念を導入して、意欲的な杜甫研究を行い、伝統的な杜詩研究に活力を注ぎ込もう。

二、もっと他人の論文をしっかりと読み分析し、先行論文をきちっと把握しながら論文を書かねばならない。自分だけにこもり、安易に「新説」と思い込んではいならない。

三、近年來、杜詩研究は活況を呈しているように見えるが、実際は内容や視点が重複しており、新しい知見に欠ける。一例に三吏三別に関する論文は、解放後30本余りも発表されたが、どれも大同小異で流俗に化している。

四、大多數の杜詩研究者は、杜詩を尊崇・賛美するばかりだが、しかし杜詩自体は実際には一千年余り前の士大夫の思想・感情であつて、現代人とは大きなギャップがある。今日の研究ではそのことも忘れてはならない。

等と、かなりシビアな発言を行っている。

さらに、今後の「杜詩学」の課題として、

一、過去の杜詩研究は、孤立的・静止的方法論だった。が、今後は、従来重視していた歴史学と文学のはかに、天文学・地理学・宗教学・民俗学・考古学・軍事学・音楽・美学・建築学等の学術成果も、大胆に導入すべきである。

二、新しい方法論として、系統論・比較論・構造主義・記号学なども試みてみるべきである。

三、海外の杜甫研究について、我々は余り知らずにいる。彼らの研究方法は、我々のものとは随分異なる。今後は相互に学術研究を進め、彼らの成果も大いに取り入れるべきである。

四、我々自身の文学・美学理論のレベル向上に努めるべきである。などを掲げ、次代を担う若い研究者が、こうした点に留意して、意欲的な研究を行うようにと期待を寄せている。

二 民国以後の中国における「杜詩研究」の総括に関するもの

これには、次の(a)～(e)の5種類がある。

(a) 「杜甫研究論文総述」(1)(2)(3)

(1) 焦裕銀——一九一〇—一九四九—『文史哲』86—6)

この「総述」(1)(2)(3)は、山東大学の杜甫研究班が『文史哲』に連載したもので、辛亥革命〜今日までの杜詩研究を三期に分けて総括している。まず第一期。辛亥革命以後、論文の形で研究発表が行われるようになり、杜甫研究も新しいスタートを切る。この第一期に発表された論文は、計一二三編。中でも有名なものは、梁啓超「情聖杜甫」で、これは一九二二年の講演である。この時梁啓超は杜甫「詩聖」説に反対、杜甫は人民に惜しめない同情を寄せた人であり、したがって「情聖」というべきであることを主張。今日の「人民詩人杜甫」論の先駆けとなった。この時期には、程千帆「杜詩偽書考」「少陵先生文心論」、金啓華「杜甫詩論」が早くも書かれており、両氏の長老ぶりを改めて感じさせられる。

(2) 鄭慶篤——一九五〇—一九七六—『同右』87—1)

この第二期には、マルクス主義・毛沢東文芸思想の指導の下に、

計六〇〇余編の論文が発表された。中でも、馮至『杜甫伝』、蕭森非『杜甫研究』が重要な成果である。このほかこの時期に活躍した研究者としては、胡小石・朱東潤・夏承燾・馬茂元等がいる。しかし、その一方では政治思想に大きく翻弄された災難の時であった。

(3) 張忠綱・馮建國——一九七七—一九八五（『同右』87—2）

再び杜甫研究が活況を取り戻し、計二二〇編もの論文が発表された。総括するのも容易ではない数だが、七つの観点から要領よくまとめられている。その項目だが、①杜甫の再評価②杜甫の生涯と思想③杜詩の思想内容と芸術上の成果④杜詩の時期毎の評価⑤杜詩の版本⑥杜甫の足跡⑦杜詩の鑑賞などとなっており、それぞれの項目に従って、主な成果の概略を紹介している。その内容については、後にまとめて取り上げることとする。

(b) 「建国以来杜甫研究情況述略」(1)(2)

（『杜甫研究學刊』88—1、88—3）

これは祁和暉・濮禾章という、成都の杜甫草堂に本部のある、杜甫研究学会の発行する『杜甫研究學刊』の編集委員を務める、両氏の共同執筆になるもので、まず前編（88—1）では、49、66、66、76、77、87の三期に分け各々の動向を総括する。前の山東大グループの見方とまた違い、地元成都の杜甫学者や研究活動を重視し、杜甫学会の会長繆鉞氏（四川大学・歴史系）や副会長の劉開揚氏（西南財經學院）らの業績紹介を忘れていない。文中、最も詳しいのは無論第三期で、それは①「十年来杜甫研究の著述と出版情勢」、②「近年来杜詩研究の領域と課題」からなる。個々の論文名をほとんど掲げないで、共通する内容ごとに全体を概括したもので、ために

やや漠然とした論述になっていてその点味気無さがあるが、全体の動向の把握として利用できる。

次に、後編（88—3）は、杜甫学会の組織・學術活動、及び各地の杜甫記念館の簡単な紹介と、今日を代表する四人の杜詩学者——蕭森非（故人）・傅庚生（故人）・陳貽楨（北京大学）・金啓華（南京師範大学）らの杜詩学への貢献を顕彰した文章である。陳・金両氏には各大学にて一度お会いしたことがあるが、彼らの風貌がそのままに再現されていて興味深い。また濮禾章氏とも直接お会いしお話しを伺うことができたが、杜甫学会秘書長・編集委員をしておられ、それだけに中国国内の杜甫学界の動向に精通しており、この報告文を通して中国の杜詩研究が身近に感じられてくるようだ。

(c) 「読『草堂』——兼談近年来的杜詩研究」(『草堂』86—2)

これは『杜甫研究學刊』が以前『草堂』と称していた時期に、この雑誌に発表された論文を総括したものである。著者は同編集委員で、また四川大学中文系主任でもある張志烈氏である。張氏は、ここで『草堂』に掲載された論文を、項目に分類して概括する。即ち、杜甫の交遊・足跡・詩文の制作年代・人事・地域・作品の思想内容・芸術性（詠物詩・山水詩・詠懷詩・詠史詩、五排・七絶・七古・律詩、夔州詩等）、杜甫と伝統文学の關係などだが、これを見ても本誌が杜詩に関するあらゆる問題を取り上げて来たことが分かる。ただ、張氏が論文名・執筆者名を全く略して紹介しているのは、惜しまれる。

(d) 「新時期杜甫研究概観」(『語文導報』86—3)

近年、詩論・文学理論の面で、特に律や象徵主義といった現代的視点から重要な仕事をしている若手研究者に、張晶氏(遼寧師範大學)がいる。これはその彼の、近年の杜甫研究についての報告書である。彼は五つの点から、近年の主要な成果を指摘する。①杜甫の政治思想—忠君と愛民の矛盾について。②杜詩の芸術表現—これは本報告書中、最も詳細な部分である。張晶氏は、ここで杜詩の象徴性に照準を当てた重要な論文を列挙するが、それは彼自身の最大の関心事でもある。③題材別の研究—山水詩や詠物詩について、④詩形式に関する研究—五排・絶句について。⑤杜甫の文学・美学思想について—具体的には、「戲為六絶句」について、などである。

(e) 「杜甫研究」123

1: 83年度分……廖仲安・李華(『唐代文学研究年鑑』84)

2: 84年度分……馮建国(『同右』85)

3: 85年度分……馮建国(『同右』86)

これらは、各年度別に杜詩論文を総括したものである。これらの報告によれば、83年度—百余編、84・85年度はともに一五〇編もの論文が発表されている、という。

三 杜甫研究の動向の概略

以上、a—eを通してみると、杜甫研究も年々充実し、発表点数も今や一年分でさえ目を通せない程になっている。したがって、きわめて大まかな把握にならざるを得ないことを前提に、私なりの総括を行うことにする。

①杜甫の政治思想—決して愚忠的なものではなく、愛國憂民を基調とすることを論証するものが多い。例えば、廖仲安「淺談杜詩中的忠君思想」(『江漢論壇』81—4)、張忠綱「応該正確評價杜甫的忠君思想」(『山東大学文科論文集刊』83—2、後に『杜詩縱橫探』に収録。山東大学出版社 90)があり、そしてこの後に、許綏氏の重要な「論宋学对杜詩的曲解和誤解」(『文学評論叢刊』22、84、のち『發微』に所収)が発表され、この問題の根底に宋学の封建倫理による極端に忠義を重視する杜詩論の存在が明らかとなる。これと並行して、杜詩の人民性を強調する論文も依然として多い。

②杜甫の詠物詩—これは杜詩の中でも様々な角度から研究が進められてきた分野である。杜詩の禽獸草木を詠じたものを対象に、そのリアルな描写と逼真性、古典上の典故との関連、そして杜甫の寄托する意味の探求などが問題にされている。例えば、邱俊鵬「詠杜甫(鸛鵲)〈孤雁〉等(夔州的)詠物詩八首」(『草堂』85—1)、朱統坊「略論杜甫詠馬詩」(『草堂』86—1)、王仲鏞・吳明賢「杜甫(成都期的詠物組詩)〈江頭五詠〉淺説」(『草堂』86—2)などがある。これらを総合すると、大略以下のようにまとめられよう。若い頃の杜甫は、向上心・積極性に富み、遠大な政治的理想を抱き、その思いを鷹や馬に託して表現した。しかし、入蜀後の詠物詩になると、そうした豪放さが影をひそめるようになり、自己のささやかな心情、あるいは自己の嘆き・憂國憂民の感情が多く述べられるようになる。この傾向は、夔州期になると一層深化する、と。杜甫の詠物詩に関するこのような優れた個々の論考が集約され、さらに杜甫の詠物詩の全体像に迫ろうとしたのが、程千帆・張宏生の「英雄主義と人道主義—詠杜甫詠物詩札記」(『文学遺産』88—5、のち

『被開拓の詩世界』に所収以下、『詩世界』と略。上海古籍出版社90)である(2)。また、杜甫のこの詠物詩を、前代までの詠物賦や後世の詠物詞との関連で捉えたものに、張志烈氏(前出)の「杜甫の詠物詩と漢魏六朝の詠物賦的比較」(『杜甫研究學刊』89-3)、『詠物詩と南宋詠物詞』(『同』91-1)がある。杜甫の詠物詩をめぐり、今やここまでグローバルに議論を拡大していることに魅力を感じるとともに、さらに飛躍して中国における伝統的詩語のイメージの継承と発展の問題として見て興味深い。

③詠史詩・詠懷詩について—「詠懷古跡」「八哀詩」「秋興八首」など、夔州期の長編五排・連章詩を中心としたものが多く、歴史的人物や事件の描写の特徴、それを通しての杜甫の歴史的評価、及びそれに託した杜甫の理想的世界観・人間観などが論じられている。『草堂』の84~85年にかけて集中的に論文が掲載され、なかでも王仲鏞の「夔州一組史詩〈洞房〉八首」(『草堂』84-2)は、重要な指摘として高く評価されているようだ。こうした一連の動きの一つの頂点となったのが、やはり程千帆・張宏生の論文「杜甫夔州詩の長編排律と連章詩札記」(『中國社會科學』86-1、のち『詩世界』所収)である。

④山水紀行詩—近年、注目を集めている分野で、杜甫の山水紀行詩の特色を分析し、あわせてそれまでの伝統的な山水詩との比較が議論の中心となっている。例えば、馬曉光「論杜甫入蜀詩對山水詩的貢獻」(『山西大學學報』85-1)、成松柳「試論杜甫的紀游詩」(『華中師院學報』85-4)などがあるが、ここで彼らは、従来の山水詩人が社会から逃避し、山水をもって楽しんだのに比べ、杜甫は現実主義的な態度で、山水草木に時代と自己の影を重ねた。そこに、

杜甫の独自性を指摘するのである。これらの論考の集大成版ともいえるのが、これまた程千帆・莫荊鋒共同執筆の「杜甫紀行詩札記」(『社會科學戰線』87-2、『詩世界』所収)である。なお、同様の視点で、夔州の山水詩を分析した論文が、『草堂』84~85年号に集中的に発表されている。

⑤杜詩の芸術性について—例えば、杜詩の意境美・象徵美などについて、西洋の美学の理論を運用したり、また中国に古くからある古典美学の方法論を用いて議論したりするなど、これも近年の杜詩研究上の一つの大きな流れになっている。まず、袁行霈「論李杜詩詩歌的風格和意象」(『社會科學戰線』81-1、のち『中國詩歌藝術研究』に収録。北京大學出版社87)は、近代的な言語学の方法を援用し、杜詩の風格の核が「沈鬱」にあることを指摘、次いで金開誠「杜詩意象積例」(『文學遺產』82-4)は、文芸心理学の方法論で、杜詩のイメージを分析する。

そして、王岳川氏が「杜甫詩歌的意境美」(『江漢論壇』83-12)、「杜甫詩歌意境美初探」(『人文雜誌』84-2)、「杜甫詩歌的象徵美」(『天津師專學報』84-1)の論文を立て続けに発表して、この議論に弾みがついた。近年、この王氏のように中国古典詩を「意境」という視点から解釈する方法が目立つが、この「意境」は、もともと王國維により強調された詩学上の概念で、今日では広く古典研究の論文に取り上げられるようになった。この王論文は、その中でも初期の成果に属す。そのためか、「意境」の視点から杜詩を論じたものとして、本論は新鮮な内容となっている。

まず王氏は、従来の杜詩研究は主に現実主義的な詩を取り上げることが多かったが、実は杜詩には多くの意境美を有するものがある

とし、その背景に中国古来の「縁情的写景」の手法があると認める。そして、これが西洋美学上の「感情移入」や「擬人法」などに当たるのだ、とする。この辺は、近年の比較研究に比べて、まだ初歩的な感があるが、ともかくその新鮮さが印象的である。次いで、王氏は杜詩の意境美の核心部の探求に移り、それを悲壮美であると認めている。

呂永・周森甲「象徵主義也是一种基本創作方法」(『文芸研究』85-4)では、この象徵主義を現実主義・浪漫主義と鼎立する基本的な創作方法とした上で、杜詩の名作「孤雁」を取り上げ、その象徵性を具体的に分析する。また、傅紹良「論杜甫詩歌的」(『陝西師大學報』85-4)では、「國產」の美学用語として、「陰柔美」「陽剛美」という二つの概念を用いている。「陰柔美」は、主に優雅・淡泊・微小・靜穩等の美を表し、「陽剛美」は、崇高・奔放・壯大・激越等を表す伝統的な美学の語彙である。これはおそらく西洋のマイン・メージャーに相当するものであろう。ともかくも近年、この視点からの杜詩分析が多く見られるが、この論文はその先駆者的業績といえる。

このほか、杜詩の芸術性を書面に題した作品に即して考察したものがある。例えば、王啓興「論杜甫題畫詩的美學思想」(『武漢大學學報』84-1)成松柳「杜甫題畫詩及其審美觀」(『草堂』85-2)などで、杜甫の創始になるこの題畫の作風の変化・特色・美意識等が論じられている。

⑥比較文学的考察—これについては、昨年興味深い論文が発表されているので、それを少し詳しく取り上げてみよう。謝思煒「自伝詩人杜甫論—中国と西洋の自伝詩の伝統—」(『文学遺産』90-3)

である。よく知られるように最近の中国では、古典文学の研究方法をめぐり、様々な場で積極的な意見が提出されている。そして、新しい概念・方法論を導入しての古典研究の必要性が強調されているが、現実にはそう簡単なものではないようである。多くの古典研究はまだ古くて厚い殻を被ったまま、その研究活動の成果が、古典の専門家の作業場の外に出て世間の広い関心を得るなど、まだまだ望めない状況にある。その中であって、この謝論文は、一読して強い印象を覚えた。

謝氏は、まず西洋の現代詩派が「意象主義」(イマジズム)に始まり、それが中国詩歌の直接的影響を受けた、という一般的事実を確認する。その上で、従来の中西詩歌比較研究者は、この象徵性にばかり焦点をおいて、両者の差異についての議論を進めがちだが、両者の根本的かつ全体的な特質を論じようとすれば、むしろ「自伝詩」というキーワードを中心に、分析して行った方がより有効であるとする。

この「自伝詩」という概念だが、謝氏は次のように説明する。中国の文人の叙情詩は、まさにこの「自伝詩」の早熟ともいべき発達とともに発展してきた、という。まず屈原に始まり、建安の詩人達に継承されて、空前の反映を示した。そして、自己の様々な感慨の表出とあいまって、山水自然や叙事の表現をも総合することになったのである。これにやがて庾信らの自伝的賦の成果が加わり、そして唐の時代を迎える。氏は、およそ「自伝詩」の発展内容をこのように捉えた後に、この「自伝詩」のスタイルをさらに大きく発展させ、叙情・写実・浪漫・象徵を一つに融合したのが、杜甫だとするのである。

以下、氏は翻つて西洋の自伝詩の伝統を問題にする。氏によれば、西洋にはもともと自伝詩という発想がなく、このスタイルが登場してくるのは、一九世紀の浪漫主義運動を待たねばならなかった。その第一の自伝詩人はワーズワースで、彼の代表作「序詩（プレリミード）」などは、杜甫の「壯遊」「詠懷五百字」に共通する面をもつ。しかし、ワーズワースの詩は中国の自伝詩に比べ、思想的・抽象的思弁の傾向が強く、個人の経歴や具体的現実の描写に乏しい。これは西洋にこうした自伝詩の伝統が十分でないことを示そう。そしてこの違いが、結局は両者の象徴詩のあり方を決定的に異ならせたのだ、という。

ワーズワースの自伝詩の発展者は、アメリカのホイットマンだが、彼の象徴詩は、さらに自我中心の象徴詩になる。浪漫主義運動以後、象徴派を代表するのは、例のホイットマンだが、例えば彼の代表作「荒地」は、表現的に見れば、これは一つの時代の重要な縮図であり、その深い象徴性などからいっても、杜甫の「秋日夔府詠懷一百韻」と比べられよう。ホイットマンの場合は、元來そのスタートから東洋的思想の反映が見られるし、今日、改めてホイットマンに帰れ、などという言い方もされているとして、筆者は、今後の世界の自伝詩や象徴詩の動向に強い関心の目を向けようとする。

子細に謝論文を検討すれば、確かにワーズワース・ホイットマン・エリオット等の名前は上がっているが、なお詳細な分析に欠けている。いわば表層的な議論になってしまっているが、西洋文学との比較という新しい視点で、中国の伝統文学を再検討する貴重な方法論を提示しているという意義の方を、今は重視すべきであらう。もっとも彼らの解釈の中には、我々の先人がかつて主張したものも

あるように思われる。が、それがどこまで言い得ているのかは、また別問題である。我々としても、このような新しい試みを受容しながら、中国古典の生命を我々なりに現代により豊かに再生させていく努力を行っていかねばなるまい。

この謝論文と同様の視点からの指摘は、実はすでにハーバード大教授のステイファン・オーエンによってなされている。『伝統的中国の詩と詩学』（ワイスコンシン大学出版 84（3）で、本書の第一章を開けると、杜甫の「旅夜書懷」とワーズワースの「ウェストミンスター橋上にて」との比較考察が試みられている。

オーエンによれば、西洋人にとってワーズワースの詩は、すべて比喩とフィクションの産物として映るという。したがって、この詩でも、一八〇二年の九月三日に彼がウェストミンスター橋の上からロンドン市内の様子をしっかりと見つめ、正確無比にそれを描いた点が重要なのではなく、それよりもむしろある何か大切なものを伝えようとする道具なのだ、ということになる。それに対し、杜甫の詩は決してフィクションではない、というのが自分たち西洋人には驚きなのだ、とオーエンはいう。それはあくまで、杜甫の個性的な経験、また杜甫が遭遇し彼が解釈し、それに反応した世界への、杜甫の様々な意識の表現になっている。つまり、杜甫の言葉は文学的言語は、普通の日記とは異なるが、ある特別な日記のメモのようなものかもしれない、というのである。

しかし、西洋人にとって、文学的言語とは、日記や経験主義的觀察の言語とは、基本的に異なると考えられている。ワーズワースがフィクション的言語を通して表現しようとしたのは、現実の背後に隠されたある何かであり、無限に充実した何かである。これに対し、

杜甫の場合は、経験的に知覚はされるがはっきりとはしない、しかしあくまで現実世界のある特別な存在に、日記的な言語で鋭敏に命を吹き込むことなのだ、とオーエンは述べている。謝論文が、自伝詩という概念で中西詩の差異を捉えたのに対し、オーエンの方は日記とか経験主義というキーワードを持ち出しているといえよう。

杜甫研究のように、研究の歴史自体がきわめて長い場合は、ともすると資料・文献の山に埋もれてしまい、過去の遺産との格闘に終始してしまいがちである。それも大変な作業だが、かりにこのまま着実に研究が進んで行くなら、いつか近い将来には、過去の杜詩資料の整理の方は随分とまとまろう。それにつれて徐々に分析・解釈の方も、新しい知見が加わるだろう。そういう大まかな展望が過去の杜詩資料については持てるようになってきた今日、この謝思煒やオーエンのように、さらに現代世界における現代人の生き方に広いかつ直接関わりあう、杜甫研究のあり方を模索するものが出てきたことは、杜甫学の未来にとって一つの明るい材料ではないかと思う。

⑦このほか、詩形式（五排・絶句・律詩）についての論も少なくない。その内容だが、五排・律詩については右の③と重複することが多い。絶句では、「歳為六絶句」に議論が集中しており、中でも劉尚勇「論杜甫（歳為六絶句）の産生及影響」（『草堂』86—2）は、重要であろう。ここで劉氏は、杜甫にこのような作品を書かせた当時の社会的背景を探り、広徳二年（七六四）六・七月頃、代宗が朝廷の官僚を集めて行った科擧のあり方をめぐる再検討に着目する。即ち、富豪・公卿・士大夫の子弟の官界への順調な進出を妨げているのは、詩賦を余りに重視しすぎる科擧制度にあるのだとし、唐詩隆盛発展の基となった進士明経科を廃止、かわりに「孝廉擧」を実

施することになるのである。この中央の科擧をめぐる激しい論争が地方の成都にも飛び火し、杜甫はこの変革に同意する青年らと文学のあり方について鋭く対立、詩賦の重要性を強調すべく、この「六絶句」を書いたのだ、とする実に斬新な見解を示す。この推測を根拠に、本詩の制作年代も従来の上元二（七六一）年説を覆し、広徳二（七六四）年説を主張。さらに杜甫のこうした「経国の大業」としての文学重視の精神が、中唐の古文復古運動にも影響を与えたのだ、とマクロ的な視点でも興味深い見方を掲げている。

⑧杜甫の生涯や遺跡については、山東大学『杜甫全集』校注組が行った実地調査の報告書、『訪古詩万里行』（人民文学出版社82）が重要な成果である。内容のつかみにくい書名のゆえに、あまり一般の目に触れていないのが惜しまれる。⑨杜甫の儒・仏・道思想の關係について、及び⑩杜甫と前代の文学遺産の關係について（陶淵明・鮑照・庾信・文選・六朝文学・陳子昂等がある）、⑪杜集の版本等に関する研究については、今は省略する。

四 外国における杜甫研究

これについては、まず葉嘉瑩『杜甫（秋興八首）集説』再版の「後記」（上海古籍88）に有益な紹介がある。本書はもと86年に台湾・中華書局より刊行されたものだが、再版にあたり新たに「後記」が付された。その文によると、本書は刊行後各方面に反響を与えたという。例えば、プリンスストン大の高友工、ハーバード大のちコーネル大に移った梅祖麟らがそれに触発されて、「分析杜甫的（秋興八首）——試從語言結構入手作文学批評」（『ハーバード大学アジア研究學報』28 68）（4）を共作として発表。これがのちに黄宣範訳で

『中外文学』1巻—6期(台湾出版 72)に、さらにのちには海外漢学双書の一冊として『唐詩的魅力』と題する書(上海古籍出版社 89)に収録されている。高・梅らの方法論は、I・A・リチャーズ、W・ニンブソン、ノースロップ・フライ、チオムスキーらの理論を用いて、杜詩のフォニク・パターン、リズム・パリエーション、シンタクス、文法的アンビギティ、イメージの交錯、語彙の不諧和等を細かく分析したものである。またウィスコンシン大・周策縱も関連論文を『大陸雜誌』50—6(75)に発表している。

この葉嘉瑩氏は、『迎陵隨筆』(『光明日報』86—87に連載)で、西洋の「解釈学」「現象学」などと中国の古典的文芸理論の比較考察を意欲的に行っているが、単なる古典学者というのではなく、古典と現代との関わりを積極的に探求する人物でもあるようだ。本書の「後記」では、そうした意図に基づくのであるが、杜詩の「秋興八首」のような詩が、台湾の現代詩、大陸の朦朧詩へ良い参考となっていくることを期待している。

ソ連の杜詩研究については、李明浜の「杜詩在蘇連的伝播和研究」(『杜甫研究学刊』91—1)が詳細である。

五 新しい杜詩全注の刊行

最後に、杜詩の画期的な新注本が今まさに刊行されようとしているので、この紹介をしよう。現在、山東大学の『杜甫全集』校注班が中心になって、新しい『杜詩詳注』が出版の予定になっている。筆者は87年の夏に、山東大学・張忠綱氏を訪問し、この計画について直接窺うことができた。以後、張氏より折々得た情報も総合すると、以下のようなになる。元来一九七六年、「中国古代作家集」の整

理出版に関する長期計画が提出されたときに、本書は人民文学出版社の分担になり、二年後、人民文学出版社が蕭滌非氏に作業を委託、早速校注グループが結成され、七九年にはそのための素案を全国の機関・専門家に送付、意見を聴取。それをもとに実際に杜詩一六首を選び出し、体例に倣って原稿を書き、それを八四年五月に専門家委員会に提出、細かな点について検討を行っている。

その専門家たちとは、殷孟倫・蔣維崧・王利器・周振甫・舒蕪・馮鍾芸・陳貽敏・廖仲安・成善楷・安旗・聶文郁・耿元瑞・葉嘉瑩及び成都杜甫草堂責任者楊銘慶、杜甫の後裔杜思智、鞏県杜甫研究会会長楊立柱等である。

その結果、新本は①まず詩文を分類し、配列は主に楊倫『杜詩鏡銓』を参考として編年毎に並べる。②題注は、制作時期・場所・人間関係等を説明する。③正文は、商務印書館の『統古逸叢書』中の『宋本杜工部集』を底本とする。④注釈は、字義・出典・句義等をつける。なお、出典は、書名・編名・巻数を明記し、省略せずに引用する。⑤集評は、参考に資するもののみ、時代順に配列する。⑥備考は、当該詩に関する参考資料を掲げる、といったものになるという。一日も早い完成が待たれる。

以上、近年の杜甫研究の現状と問題点を中国を中心に概述してきた。ここで言及できなかったことは少なくないが、それについてはまた他日を期したい(6)。

※小論は、91・10・18の中唐文学会(於大阪市立大学文化交流センター)での報告をもとに、加筆したものである。

注

- (1) 拙稿「許綸〈宋学における杜詩論〉訳注」(愛媛大学教育学部紀要Ⅱ—24—1 91—9)は、この許論文の訳注である。
- (2) 拙稿「程千帆・莫砺鋒・張宏生らの魅力的な杜詩研究—書評『被開拓的詩世界』」(『東方』92—4 東方書店)を参照。
- (3) Stephen Owen: *Traditional Chinese Poetry and Poetics*. The University of Wisconsin Press, 1985.
- (4) "Tu Fu's Autumn Meditation: An Exercise in Linguistic Criticism," *Harvard Journal of Asiatic Studies*. Vol. 28, 1968.
- (5) 関連文献として、拙稿「近年の〈杜詩学〉研究動向」(上)『集刊東洋学』67 92—5)を参照。